Title:道へき・複連　130号.ec6 Page:6 Date: 2007/11/20 Tue 16:41:13

1．研究主題

「主体的に学び、豊に言語表現し共に学び合う子どもの育成」～複式学級の特性を活かした学習指導の充実を目指して～とし、実践的研究に取り組んだ。

2．研究内容

本校は、本研究主題を追求することが、教育目標の定める子ども像の達成に繋がると押さえ、研究主題を①「主体的に学ぶ子どもの育成」②「豊かに言語表現する子どもの育成」③「共に学び合う子どもの育成」の３つの視点から捉えることとした。その視点に合わせて研究仮説を設定し、授業研究等を積み重ね継続的に研究を進めてきた。

3．公開授業

公開授業①＝１・２年生算数科。１年生「３つのかずのたしざん、ひきざん」２年生「たし算とひき算のひっ算」導入場面は、２年生のリードのもと協力して導入問題を解決させた。１年生は視点１、２年生は視点３の要素を授業の中に取り入れられるように計画した。

公開授業①＝３・４年生国語科。３年生「わすれられないおくりもの」４年生「一つの花」

３・４年生とも視点１に重点をおいた授業を計画した。両学年ともワークシートを活用することにより、児童全員に学習の目的や方法を捉えさせる手立てとなり、子ども達が主体的に学ぶことができた。

公開授業②＝５・６年生国語科。５年生「森を育てる炭作り」６年生「人類よ、宇宙人になれ」５年生におけるワークシートに段落の内容の要約文を書く活動、要約文を基に小見出しをつける活動では、児童が互いに情報を交換しながら課題解決に取り組む姿が見られた。６年生では、スムーズに要約文にまとめることができるように、初めにおおまかな段落の内容を確認したり、キーワードを見つける作業を展開した。

4．研究協議

研究協議の中では、ワークシートの有効な活用の仕方、言語表現を育成するためには、基本話型の継続的な取り組みが重要であること、極小規模の学級の場合の指導の工夫（同内容であれば学年を越えた話し合い活動なども必要ではないか）など、多くの意見が寄せられた。

第５分科会
三笠市立幾春別小学校

1．研究主題

「一人一人が生き生きと活動し、自らが意欲をもって取り組む子どもの育成」～少人数指導の特性を生かした算数科の授業づくり～

2．研究内容

一昨年度、「児童に興味･関心を持たせる問題提示の工夫」（研究内容１）について重点的に研修を進めた。今年度は、レディネステストや学力テストの分析により児童の実態を詳細に把握し、重点的に取り扱う領域を学年ごとに設定した。

3．公開授業

①公開授業１（川島重之教諭）

１年生「たしざん」

・問題提示の工夫

身近な人を写真で登場させる。

・学習の見通しを持たせる（個に応じた手立て）

「たす数を分けて１０を作る」「ブロックを使う」「〇を書く」「さくらんぼを使う」「シールを使う」など

２年生「たし算とひき算のひっ算」

・問題提示の工夫

畑で実際に収穫したじゃがいもを題材とする。

・学習の見通しを持たせる（個に応じた手立て）

「筆算」「ブロックを使う」「図を使う」

②公開授業２（高橋昌裕教諭）

５年生「小数のわり算」

・問題提示の工夫

実際に鉄の棒を提示する。

・学習の見通しを持たせる（個に応じた手立て）

「わり算の決まりを使って」「０．１を基にして」「面積図を使って」「筆算で」

６年生「単位量あたりの大きさ」

・問題提示の工夫

割り切れる数字を提示。

・学習の見通しを持たせる（個に応じた手立て）

「１㎡あたりの人数で考える」「１人あたりの面積で考える」「図で考える」「最小公倍数で考える」「分数で考える」

4．研究協議

①研究内容に関わって

問題提示の工夫について、学習の見通しの持たせ方について、解決方法と教材教具、レディネステストの評価と本時の指導内容

②複式教育に関わって

学習訓練について、個別指導のあり方と時間の確保について、間接指導における交流について、自己評価について、小規模校の特性、異学年同内容指導における学年差の克服

③　助言者より

指導の改善につながる評価、問題を解く必要性を抱かせる問題提示、間接指導につながる直接指導の充実、道へき複と関連させた研究、個に応じた解決方法の選択、個別指導と子どもどうしの交流